

桂 茂之氏 ご講演録（平成 26 年 8 月 9 日「戦争体験を聞くつどい」）

<終戦一週間前に落とされた原爆 その三つの威力>

69 年前の昭和 20 年（1945 年）8 月 9 日、午前 11 時 2 分、長崎の浦上地区松山町上空 500 メートルで原子爆弾が炸裂しました。8 月 15 日の終戦のちょうど 1 週間前に、米国によって極めて残酷な爆弾が落とされたのです。その被害状況は、死者は 7 万 4 千人、負傷者 7 万 5 千人、全壊・全焼した家屋が 1 万 2 千 9 0 0 戸、半壊が 5 千 5 0 0 戸と発表されています。

原爆の威力の特徴として、熱線、爆風、放射能の三つがあげられます。爆弾が落ちてわずか 3 秒間で半径 250 メートル以内の場所では、地表の温度が 3000 度～4000 度になったと推定されています。このすさまじい高熱が地表を包み込み、人間は異常な火傷の被害を受けました。皮膚が焼けただれてはがれ、皮下組織から液体がしたたり落ちているという状態の人をたくさん見ました。また、爆風も様々な被害をもたらし、建物だけでなく、人も殺傷しました。放射線は、人体のいろいろな細胞を破壊しました。損傷の程度は受けた放射線の量によって異なりますが、発表されている統計によると、爆発した 1 キロ以内で放射能を受けた人は、ほぼ全員亡くなっています。また被爆直後から、嘔吐、下痢、発熱、皮下出血などの症状が出て、約 1 週間後から死亡者が増えたようです。そして死にいたらなかった場合でも、放射能は人体の奥深くを傷つけ、後になって様々な症状を引き起こすことになったのです。放射能の恐ろしさは、被害が長期にわたるということであり、私もその被害を受けた一人です。

<爆心地・浦上地区とは>

私は当時 14 歳、中学 3 年生でした。まず当時の長崎市の状況についてご説明します。長崎駅の南側に長崎港があり、また三つの山並みに囲まれていることから、長崎市は平坦な地が少ないという特徴があります。昔から「坂の長崎」とよく言われ、住宅などは斜面に建てられていました。原爆が投下されたのは、長崎駅から 2 キロほど北に位置する、浦上地区の松山町で、地上 500 メートルのところで爆発しました。したがって、浦上地区の被害は惨憺たるもので、その日、私はまさにそこを通過して家に帰りついたのです。

長崎港は 16 世紀半ばにポルトガルの船が入ってきて以来、様々な外国船が寄港し、外国との交易の場として大きく発展してきました。一方、浦上地区は、大村藩の所有地でありましたが、藩主がキリシタンであったこともあり、イエズス会に浦上地区を寄付したという歴史があるため、キリシタンが数多く住んでいました。原爆が落ちた当時、長崎市全体でキリスト教信者の数は 2 万人といわれていますが、そのうちの約 1 万 5 千人が浦上地区に住み、原爆により、その約 1 万人が犠牲になっ

たということです。

＜なぜ長崎に、なぜ浦上に落とされたのか＞

そもそも米国は長崎に原爆を落とすつもりではなく、北九州を目標としていました。ところが米国機のパイロットは、北九州上空が悪天候で雲に覆われていたため、3回旋回したが投下目標を目で確認できず、第二目標地の長崎へ向かったといわれています。当初、米国が予定していた原爆の投下時刻は、広島と同じ午前8時でしたが、長崎へ変更したため、約2時間遅れの午前11時2分に投下されたのです。

長崎もその日は雲が多く、私も夏の白い雲がたくさん浮いていたのを覚えています。そのため、たまたま雲の切れていた地点があり、そこに原爆が落とされたということで、そこが浦上地区だったのです。米国がもともと想定していた投下目標地点は、長崎駅と三菱造船所を結んだ線の間接点の、港の上空だったということです。もしその目標に落とされていたら、被害はさらに甚大になっていたし、私も長崎駅の近くを歩いていたので、影も形もなくなったでしょう。

（注：投下予定地点に関する通説は、米国の資料などから、長崎市中心部の中島川にかかる常盤橋から賑橋付近とされており、長崎市は2012年に、原爆の投下目標が中島川流域の市中心部であったことを示す説明版を中島川公園に設置している。他方、桂さんは何かの文献に、予定地点は「長崎駅と三菱造船所を結んだ線の間接点の港の上空」と記されているのを読んだと記憶しており、諸説あった時期があったのではないと思われる。現在、桂さんが読んだ文献などについて調査中。）

＜運命の日8月9日＞

当時、長崎には、軍需工場や艦船を製造する工場がたくさんありましたが、とくに浦上地区には、それが集中していました。また、これら工場や官公庁周辺の市民の住宅は、敵の爆撃などによって火災が発生して延焼するのを防ぐために、強制的に退去させられ壊されました。これを強制疎開（注：現在は「建物疎開」という表現が一般的）といっていました。人的被害を少なくするためであると同時に、官公庁の建物や、軍需工場群などを火災から守るためでもありました。

わが家も、長崎市役所の近くにあったので、早い時期にその対象となり、郊外に引っ越しせざるを得なくなりました。そのため、通学には汽車を利用するなどで、2時間近くかかるようになりました。

昭和19年になると、長崎は敵機の飛来も多くなりましたが、それほど大きな損害を受けることはありませんでした。ところが原爆が落とされる直前には、爆撃機が頻繁に飛来するようになり、造船所をはじめ、工場群が爆撃されました。そこで当時、軍需品を生産していた三菱グループは、爆撃の目標にならない学校などに、工場施設の一部を疎開することにしました。私が通っていた長崎県立長崎中学校にも、

三菱造船所から工作機械の旋盤や研磨機などが運び込まれ、学校の寮などが工場になりました。中学3年生から5年生までが、その機械の操作を習い、海軍特攻隊が乗るボートの部品を作っていました。私は完成したものを、非常に重量感がある鉄製の大八車に載せて、学校から本工場まで運搬する担当でした。鉄の車に、鉄製の製品を積んでの運搬は大変な労力が必要で、4人が1組になり交代しながらの作業でした。その行程は片道3時間、1日1往復することになっていました。

原爆が投下された日、8月9日は早朝から、敵機接近の空襲警報が鳴り続き、学校到着が遅れたため、運搬の出発もいつもより約1時間遅れました。早速、学校から本工場へ向かって出発したのですが、この日は暑さが厳しかったので、途中、氷屋に立ち寄り、20分ほど休憩しました。この休憩が、結果的にわれわれの命を救ったのです。つまり、休憩したことにより、投下された爆心地から、より遠くなり、さらにわれわれが歩いていた地点が、山の稜線に遮られて、熱線を直接受けることなく火傷が避けられたのです。

氷屋を出発して約10分行ったところに中町教会[注：当時の名称は西中町天主堂〔2025年3月追記〕]がありますが、この教会の横を通っているとき、飛行機の爆音を耳にしました。直観的に米国機だと思い、爆音の方向を見上げました。白い夏雲が一面に広がっていましたが、その中で、わずかに青空が見えるところから、白い物が落ちてきました。

「おい、あれは落下傘じゃないか？」

と仲間に声をかけたその時、七色の閃光が目の前できらめき、その直後に、ものすごい爆風がきました。私の身体は完全に制御不能となり、教会の壁に吹き飛ばされて、道路の側溝に落ちました。そのあと、私は完全に気を失ってしまいました。

しばらくして、我に返り周辺を見ると、さっきまで夏の光が燦々と輝いていたのが、夜の闇の世界となっていたのです。そして一面、黒くなった空に真っ赤な太陽が一つ見えていました。この世のこととは思えない、その異様な情景の変化にぞっとしました。友達も同じ時に、元に戻ったようでしたが、皆、また何か起きるような不安と恐怖を感じて、お互い言葉をかけることもなく、ただ茫然と顔を見合わせているだけでした。そのあと、雨が降ってきました。これが、後に言われる「黒い雨」、放射能の雨だったのです。長く降ることはありませんでしたが、私たちはその雨を浴びました。

まもなくして、夏の日射しが戻り、あたりが明るくなりました。そこでやっと皆、我に返った気がしました。今後の行動をどうするか話し合い、学校に戻ろうということになりました。ところが、道路は瓦礫や木片で埋まっており、そう簡単に大八車を動かすことはできません。必死になって重い車を押していくと、車が瓦などを割る大きな音が、周辺の異様な静寂さの中に響き渡り、その音が恐怖感を一層、増幅し

たりして、尋常な状態ではありませんでした。それでもみんなで励まし合い、学校への道をなんとか進みました。

しかしあまりの怖さが続いたため、途中に見えた長崎県知事官舎の防空壕に避難させてもらいました。しばらくすると、防空壕に被災した人が入ってきましたが、その人たちは、顔や手の皮膚が全部焼けたで、皮下組織から液体が流れ落ちていましたし、中には頭髮がちぢれている人や、苦しさをこらえている人、また泣いている人など様々でした。しかし薬もなく、私たちは、どうすることもできないので困っていました。その後も、次々と被災者が入ってきて、とうとう防空壕が満員になりましたので、われわれは学校へ向かってその場を離れました。

＜わが家への道～爆心地で見たもの＞

学校に戻り、先生に状況を説明したところ、交通機関は麻痺しているので、家までの遠い道のりを歩く覚悟をなさいと言われました。そこでわれわれは相談して、学校から山を越えて浦上に出て、そこから汽車の線路に沿って帰ろうということになりました。山の頂上まで行って浦上一帯を見ると、あらゆる建物が破壊されていて、見る影もなくなっている悲惨極まりない状態になっていて、大きなショックを受けました。そのときは、それが原爆のためだということにはわかりません。いったい何が起きたのか・・・ただそれだけでした。

そのあと線路の方へ向かって山を下り始めましたが、道は瓦礫や木材で埋まり、電柱は倒れて電線が垂れ下がり、道なき道と化していました。火災も何か所か発生していて、その中には、火の海となって大きな炎に包まれたところもありました。歩きながら目に入った浦上地区の人的被害は、誠に悲惨でした。道の傍に倒れたまま、死んでしまっている人や、火傷、怪我で道路や畑に横になって苦しんでいる人など多数見かけられました。また、当時は町内会などで、防火用の水槽を各所に設置していましたが、被害者の中にはその水槽に上半身突っ込んだ状態で亡くなっているのが何か所かで見られましたが、火災や熱風で苦しんだ結果ではないかと想像しました。

歩いている道に沿った倒壊した建物の中からは、助けを求める声がずっと聞こえていました。爆風で瞬間的に家が押しつぶされて、家の中にいた人たちが動けなくなり、道を歩いているわれわれが見えるので、

「助けてくれ！」

と叫んだり、呻き声をあげているのが聞こえていましたが、われわれだけではどうすることもできず、心の中で詫びながら通り過ぎていきました。そんな状況がずっと続きました。

このままでは、線路まで到達するのは難しいので、山の麓に沿った道を探して歩くことしか術がないと判断し、予定を変更してその方法で歩くことにしました。結

果的には右往左往しながら、われわれは、爆心地付近を長時間徘徊することになってしまったのです。そのときは、当然、放射能のことなど全くわかっていませんでした。

家に帰りついたのは午後 9 時頃でしたが、長崎市内の方向の空を見ると、一面真っ赤に染まっており、大規模な火災が発生していることがわかりました。

「倒壊した家の中から助けを求めている人たちは、生きたまま焼けてしまったのか・・・」

そう思うと申し訳なさでいっぱいになり、手を合わせました。

<再び市内へ～忘れえぬ光景>

その翌日から、私は体調が悪くなり、嘔吐、発熱、下痢など様々な症状が出て、10 日間くらいは起き上がれませんでした。その後、少し落ち着き、外にも出られるようになりましたが、学校の友人や親せきのことが心配になり、長崎市内へ行きたいという気持ちが募ってきました。原爆投下から約 2 週間後、市内を目指しました。浦上地区は、被爆当日より、さらに見るに堪えない状況になっていて、犠牲者の遺体など整理する手立てもない状態で、放置されているのが方々にありました。また、木材を積み重ねて茶毘に付しているのが目撃され、そこからの異様な臭いが一面に流れているのは、忘れられません。また浦上川の川辺には、死体が連なり、数えきれないほどでした。その中に、何頭かの馬の死体があり、馬を曳いていたと思われる人も横たわっていました。おそらくこの人たちは、あまりの熱さに水を求めて川辺まで来たのでしょう。本当に不思議なほど、死体が連なり、どれも真っ黒に変化して、倍くらいに大きく膨らんでいました。路面電車も焼け焦がれて、乗客がその横に死体となって並び、人間とは思えぬ姿でした。

今も目に焼きついて忘れられない光景があります。長崎駅近くの本一の電柱です。当時の電柱は木柱に防腐剤の油をしみこませたものでしたが、原爆の熱線のために、電柱の先端に火が点いて燃えているのです。まるで線香のように、くすぶりながら何日も燃え続け、ついに地面まで燃え尽きました。一本の電柱に火が点いて、くすぶって下まで燃え尽きるというのは、今では考えられない異常な状態です。ところが当時は、誰もそれを不思議だとは思わなかったほど、周辺が混乱して異常な状況だったということが非常に印象的でした。

<二度と被爆者を出さないために>

このように、私は原爆が投下された日、爆心地付近を長時間徘徊し、さらにその後も浦上地区を歩いたため、私の身体は放射能を大量に受ける結果になりました。当時、放射能の知識など全くなかったし、色も香りもない放射能を浴びたことなどわ

からなかったで、全く気にしなかったのですが、かなりの日数が経って白血球の異常値がわかりました。被爆して 50 年目にして、胃と大腸の癌を宣告され、手術を受けました。一旦、回復したのですが、一昨年、二度目の大腸癌を発症し、再び手術を受けました。その後、半年以上にわたって入退院を繰り返しましたが、現在は落ち着いてはきました。しかし体調は、はかばかしくないという状況です。昨年は国から原爆症という認定を受けました。

原爆は使用されると、残忍で悲惨な地獄を思わせる結果になります。この核兵器の生産や使用は、絶対に許されないことです。不幸にも日本人が初めて、広島と長崎で、この大量破壊兵器の体験をさせられました。このとき厳しい体験をした被爆者も年々少なくなってきました。われわれ被爆者は、この生々しい体験を記憶の中でも風化させることがないよう、広く伝えていきたいと思います。現在、世界中で核兵器は、1 万 6 千発以上あるといわれ、その一つ一つが広島、長崎で使用された原爆より、はるかに大きい威力と命中精度があるということです。将来、テロや戦争でこれが使用されれば、人類の滅亡につながります。したがって世界中の一人一人が、この兵器による被害の実態を知り、自分自身の上に、この残虐な核兵器が降りかかってきたときのことを考えて、核兵器廃絶の必要性を訴えてほしいと思います。われわれ被爆者は、国立市の平和事業に協力させてもらったり、その他、あらゆる機会に戦争や核兵器の恐ろしさと、平和のありがたさを訴えていきたいと思っています。特に若い人たちに伝え、訴えていきたいと願っています。